

修士論文の和文要旨

大学院電気通信学研究科			博士前期課程	人間コミュニケーション学専攻
氏名	米田 和広		学籍番号 0536025	
論文題目	歌謡曲における言語表現の変化			
<p>要 旨</p> <p>背景と目的</p> <p>近年、電子コーパスを用いたテキスト研究が盛んになってきている一方で、歌謡曲の歌詞については、分析対象が限定的であったり、計量的な手法について不十分な印象を持たざるを得ないものであったりと、近年の計算処理能力の高速化や、データ蓄積量の増大化を鑑みても、その量について妥当であるとは考えにくい。</p> <p>このような背景をふまえて、本研究においては大規模データベースの必要性を確信し、その構築とともに時系列と語彙の形態素から有意な関係を見出し、そこから歌謡曲における言語表現の変化、これからの歌詞について調査、分析、考察を行う。</p> <p>方法</p> <p>歌詞検索サイトから曲を抽出した結果、1984 年から 2006 年までの 23 年間で 30,051 曲の抽出ができ、形態素解析システムにかけた結果、総語彙数はのべ 6,390,536 語、文字数にして 12,778,392 文字となった。この得られたデータから文字種使用調査を試みることで歌詞中の文字種の傾向と予測を測り、さらに時系列と語彙の各年の出現頻度、また時系列とその語彙が各年で何曲に出現したかの「ヒット件数頻度」との相関、また出現頻度とヒット件数頻度との関係を網羅していくことにより、語彙のこれからの考察を試みた。</p> <p>結果と考察</p> <p>文字種は英語表記が年の増加に伴い増加傾向にあること、またそれと対照的にひらがなとカタカナ、特にひらがな表記に関しては著しく減少傾向にあることが年別の文字種頻度と時系列との相関分析からいえた。</p> <p>また、時系列と出現頻度、ヒット件数頻度との相関分析においては、それぞれの上位 1,000 語を見た結果、近年において歌謡曲は助詞の使用度合いが減少傾向にあることが確認できた。</p> <p>このような結果をふまえ、本研究については大規模歌謡曲コーパスの構築の成功、また歌詞についての最近約 20 年について、歌謡曲における言語表現の変化を検討し、歌謡曲に特徴的と見られる変化と、歌謡曲以外にも見られるような偏在的な変化とを見出すことができた。</p>				